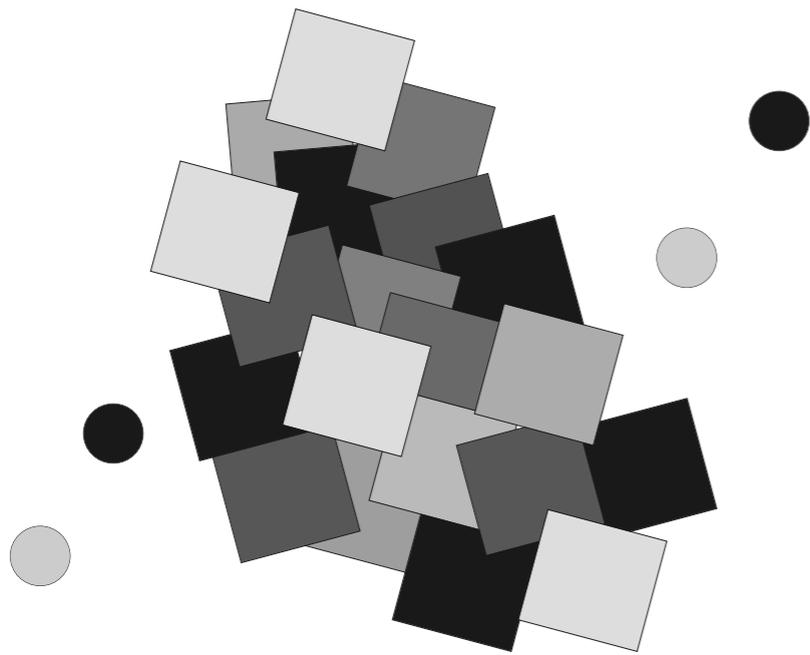

月 刊

MAROAD

Vol.172



2022.04.24

詩と評論

月刊「Maroad」

Vol.172:2022.4.24

「月刊Maroad」編集部

詩・俳句

イルミネーション (俳句)乾佐伎 3
 サハラ塵 詠 (俳句)岩脇リーベル豊美 3
 訓練ソネット大西隆志 7
 小骨野口裕 10
 花びらが舞うようににしもとめぐみ 10
 蛙合戦黒田ナオ 11
 無原罪な流離大橋愛由等 12
 ほら貝月村香 13
 飲み物中嶋康雄 14
 翔びたつた鳥が残した《秘儀の葉》富岡和秀 15

ART NOTE

珈琲タイムレッスン (大人の絵画教室) ④はらだてつろう 8

英詩翻訳

連載3回目/アイザック・ローゼンバーグ「戦争のしらせを初めて聞いて」安西佐有理 9

連載小説

『マルクスの場合』—「犬の系譜」②シロ (小説)諸井学 4
 15回目/「海猫堂店仕舞記」千田草介 5

連載 評論・エッセイ

想像力の彼方に〈11〉大西隆志 6
 神戸詞あしび 160 「播磨の地域性を全面に押し出したエクリの会」大橋愛由等 16

編集部だより★94/44年ぶりとなろうか、パゾリーニ監督作品「王女メディア」(1969)を観る。主演女優は不世出のDIVA マリア・カラス。ギリシア出身の両親を持つカラス。その容貌からして、彼女以外だれがメディアの役を演じるのか、というほどはまり役であった。なにしろ黙っていても、カラスはメディアになりきっているのである。この映画の魅力は、半分以上、カラスの美貌と存在が占めている。わたしは高校時代から、ギリシア悲劇を読みつけ、いまも座右の書として、ときどき読み返している。このエウリピデス作「王女メディア」という演劇作品は、紀元前431年にアテナイのディオニューシア祭で初演されたというから、いまから2400年前の作品となる。翻訳の巧みさもあって、その内容はまったく古びていない。というより人間の業というのは、2400年前とそうたいして変わっていない事実を確認するのである。映画はエウリピデスの戯曲に沿いつつ、パゾリーニならではの作品に仕上がっている。彼は詩人でもあり邦訳詩集も一冊ある。映画は彼の「映像詩」というべき作品内容で、戯曲にはない台詞(詩)も多く、それはひとつの卓越した詩作品と言い得るレベルであった。このメディアについては、夫が政略結婚のためにメディアを捨てるという悲運の女性という側面。その夫に対して、魔術を使って報復するという巫女的な側面。その報復の過程で自らの子を殺めてしまうという反母性的な側面——などが読み解かれている。近年は、フェミニズムの観点からの読み直しもあり、多様に解釈できるキャラクターである。しかし忘れてはいけないのは、わが子を殺めたあと、裏切った夫を罵倒しつつ龍車に乗り込んでメディアが向かう先は、夫とはことなる新たなパートナーが棲む都市であるということである。／第一部読書会の語り手は、野口裕氏。テーマは「寺田寅彦について」です。(大橋愛由等)

◆イルミネーション

乾佐伎

雨音が応えるイルミネーションに
 雲にまで見られていそう泣き顔を
 どの道も続いているはずオリオンに
 信じれば会える四葉のクローバー
 母さんと呼ばれてみたいそよ風に

◆サハラ塵 詠

岩脇リーベル豊美

サハラ塵を歳時記に汲む黄落陽
 兵士のみ助けられるか空真つ赤
 装甲車の犀色追いてプラモ売り場
 ツンドラの狐ツナ缶つつく飢餓
 ずずらんの蠱惑にはだけし鎖骨襟
 死の言葉聞けず独裁者の昔日
 モザイクのない春の屍の画像
 紛争国に帰国せし冬学期の学生
 死亡率300%人間たち平和論者に転向し
 帰り蝶明治調浪漫の共同幻想
 同族の酒酌み交わし了解せず

◆ 『マルクスの場合』 — 「犬の系譜」② シロ

諸井学

ある朝、わたしは祖母の大きな声で起こされた。シロが子供を産んでいるというのだ。わたしはその声に跳び起きて、パジャマのまま裏庭へ駆けて行った。

シロは犬小屋の前で横たわって、腹で大きな息をしていた。シロの胸のところには仔犬が二匹いた。シロはその二匹を長い舌で愛しそうに舐めていた。

「まだまだ出てくるぞ。五匹は産みそうじゃ」

祖母はしゃがんだわたしの後ろで独り言のように言った。祖母も緊張しているらしく、入れ歯をガチガチと鳴らしていた。

シロが丸くうずくまった姿勢から首をのけぞらせた。

「陣痛じゃ。また産まれるぞ」

シロは立ち上がった。すると、シロのお尻から濃いねずみ色の光沢のあるぬめぬめした袋のようなものが出てきた。少し血がついている。

シロがその袋を噛み破ると、中から薄茶色の仔犬が現れた。

「テツの子じゃ」と、祖母が言った。

「どうしてわかるの？」

「シロがテツと盛ったからじゃ」

シロはぬめぬめした袋を食べてしまった。そして、仔犬を丁寧に舐めた。仔犬はキュルキュルと小さな声で泣いている。眼を閉じたまま腹這って乳房を求めている。

シロは祖母が言ったとおり、可愛い仔犬を五匹産んだ。二匹が雄で、あとの三匹が雌だった。わたしは服に着替えると、急いでアキラに教えに行った。

学校から帰って犬小屋を覗くと、五匹の仔犬は眼を閉じたままシロの乳首に群がっていた。日ごろ落ち着きのないシロも、この時ばかりは母親らしくどっしりと横たわっていた。乳を飲み終えると仔犬たちはすやすやと眠る。

わたしが近づくと、シロは小屋から出てきてわたしにじゃれついた。わたしが抱きかかえるとシロはわたしの顔を舐めた。シロを寝転がせて腹を擦ってやると、シロは気持ちよさそうに腹を上に向けて両脚を開いた。わたしの前には、シロが仔犬たちを生みだした不思議な割れ目があった。わたしはその割れ目を指でなぞった。そして、その中に人差し指を入れてみた。突然シロは跳ね起きて、わたしに向かって低く唸った。

海猫堂店仕舞記 ⑭

千田草介

JRのガード下をくぐって北へたらたら坂をのぼって

くと、天文学館の時計塔とプラネタリウムのドームが見えてきた。時計盤の針は五時四十六分を指している。その門前に、ひと目で「シゴセンジャー」とわかる面々が整列していた。旧知の女性隊員はいなかったが、宿敵の「ブラック星博士」が彼らといっしょである。

「ようこそ」星形頭巾をかぶりサングラスをかけたブラック博士が口をひらいた。「いいところだが、あいにく今日は休館日だね。あえて入ってもらうには、ヘラクレスの十二功業にまさるともおとらぬ試練をくぐってもらわねばならぬですわい」

「うわさにきく謎かけかね」ミロクさんがたずねた。

「まず入館料を払っていただきます。お一人様七百円」

「う」ミロクさんの顔がくもった。「それは初手から厳しい。わたしはカネに縁がない。このまえ上京したとき神楽坂で飲んでいて酒代がないから、近くの版元から編集者がやってくるのをとっつかまえて払ってもらった。あのとき原稿料の前借りをしてもっとカネをせしめておくんやった」

「おお」ブラック星博士が指を鳴らした。パチン、という音とともに星が散った。「それが例の『星を売る店』ですな」

「そうや。この裏の月照寺で書いた」ミロクさんは天文学館に目をやった。「まだこんな建物がなかったころや」

私は、さつきから時計塔の針がちつとも進んでいないことに気づいた。「五時四十六分……」

「大震災」ブラック星博士が言った。「阪神淡路とかいうて、肝心のここ明石の名前がすつ飛ばされたせいで時空が立往生しておる。プラネタリウムにもやたら空隙がふえた。そちらの商売はどうですか」

「ミロクさんに商才がない」チャンドラが言った。「売れんもんで、M&Aでうちの店の傘下に入ってもらたんや」

「お、あなたは」博士は猫に視線をおとした。「月の化身か」

「あなた」チャンドラが返す。「ブラックホールやろ」

「いかにも」博士はうなずく。「宇宙の無数の銀河の中心には巨大ブラックホールがある。いわば宇宙の柱石」

「それにしても軽そうだね」チャンドラがまぜ返した。「軽妙洒脱がわたしのモットー」博士は無然とした顔で「先立つものがないなら、このスター・ゲイト、入れるわけにはまいらぬ。算段がつくまでお引き取り願おう」

私たちはさらに坂をのぼって科学館北側の月照寺門前についた。

(つづく)

あなた、つてことばが耳についていたのは少年の頃で、僕にとつては祖母の家に預けられていた時の西方のイメージと重なっている。西の方角は産土の加古川を指していた。そして「かなた」は、漢字の「彼方」になつていく。ここで人の口によく膾炙される一篇の詩を取り上げてみる。実を言えば多くの誤解した思い込みなのだが、名訳と称される上田敏の詩人カール・ヘルマン・ブッセルの「山のあなた」と、三遊亭歌奴の新作落語の「山のあな、あな、あな」をテレビで覚えていて「あなた」と「あな」、そして「あなた」ではなく「かなた」

大切にした訳詩集だったといえる。それは七五調に訳されているだけではなく、例えばこの詩の魅力はア行の音とナ行の音使い方によると思うのだが、「あなた」と「かなた」とでは母音と子音により微妙に違っている。ことばの響きが詩文と散文の違いなのだが、意味以上に大切な在り方だったことがわかる。口誦文学が失われたと言われる現代詩の世界だが、近代詩にはまだ口誦性が満ちていた。詩とは口誦のならないでもあるはずだが、そこには定型の問題もはらんでいて、ある種の詩への本質的な姿がうかがえる。

大西隆志 想像力の彼方に〈12〉

が刷り込まれてしまつたていた。ブッセルの詩には彼方の意味もあるようだが、上田敏は「山のあなたの空遠く／「幸い」住むと人のいう／噫われひとと尋めゆきて／涙さしぐみかえりきぬ／山のあなたになお遠く／「幸い」住むと人のいう」、と訳して日本の詩壇に大きな影響を与えた。この詩には訳者のドイツへの憧れと、新ロマン派の薫りがいっぱい詰まっているようだ。

多くの思い込みで誤解を重ねてきた次第だが、この詩の内容というか、意味としては間違っていない。意味そのものというよりは音の並びが大事だったらしい。上田敏の訳詩集『海潮音』は音の響きを

近代詩の詩人たちは頻繁に歌曲を作っていた。脚韻、頭韻も含めてことばの魔術を繰り広げていた。七五調とは日本の伝統的な詩形ではあるが、時間を取り換えるようにして、ことばが時制をこえて古代からも繋がっているようだ。そんな状況のなか定型を批判することで、音楽性を求めるのではなく、あらたな詩形の再定型性を生み出していくことになる。それは短詩として抱えてきた国家意識との乖離を意識しながらも、大衆の声が届きやすい短歌、俳句、川柳も含めて定型への懐疑の思いは強い。そこには口誦性に併走するように音楽性が失われることの恐れと、「彼方」への眼差しの持ちようの無さが、詩の持っている彼方此方への自在さをあらためて、旅の詩の人へと往還するための憧れになつていくようでもある。

◆ 訓練ソネット

大西隆志

思いっきり走っていた、必死が走る

必死とはなんだつたんだろう

身体に残っているのは走っている記憶

砲撃から逃げていたり、火災からも逃げて

必死という形容動詞誰もが目に付かないようだよ
 ぼく一人だけの確かさ、街並みには覚えがあり
 爆弾が急に空にあらわれ、空に浮き出す

映像の訓練は血も流れないし、手足も離れない
 すこしハイになつたりするわけではないのだ
 前世が時の隙間に顔を出すように、ハハの目にダブる

一九四五年、川崎航空機明石工場の側を過ぎるハハ
 動員された若い女子の血だらけを眼に焼き付け
 大切なることや、無いことを繋いでいる

安西佐有理 訳

Amy Lowell, Pictures of the Floating World (1919)

エイミー・ローウェル『浮世の絵』(1919年)より

Paper Fishes

The paper carp,
At the end of its long bamboo pole,
Takes the wind into its mouth
And emits it at its tail.
So is man,
Forever swallowing the wind.

「紙の魚」

紙の鯉は
竹竿の端で
口へと含んだ風を
尾から放つ
人もまた
延々と風をのんでいる

The Return

Coming up from my boat
In haste to lighten your anxiety,
I saw, reflected in the circular metal
mirror,
The face and hands of a woman
Arranging her hair.

「帰還」

舟からいそいそ
おまえの憂いを軽くしようと上がり
目にしたのは、丸い和鏡にうつる
おんなの顔と手が
髪を整えるさま

Time

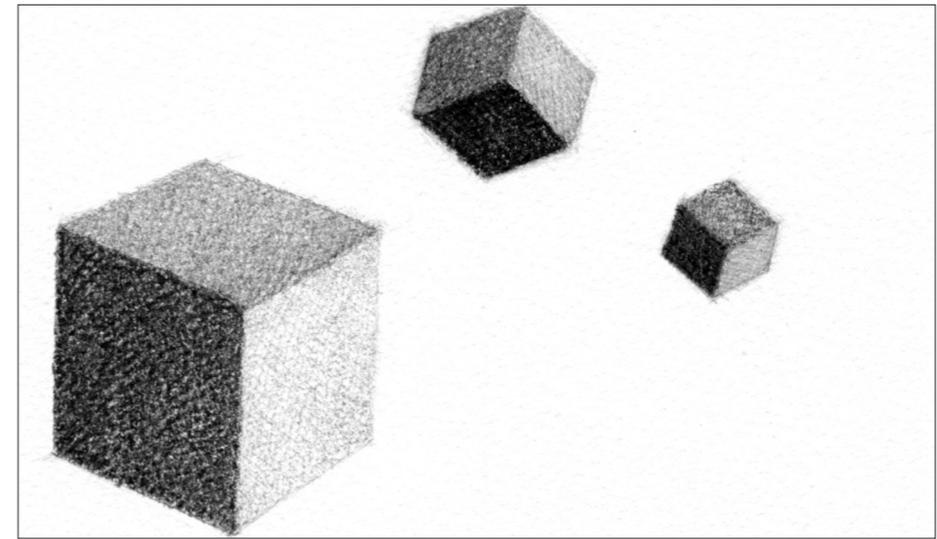
Looking at myself in my metal mirror,
I saw, faintly outlined,
The figure of a crane
Engraved upon its back.

「時」

和鏡にわが身を映しみて
目にしたのは、ぼんやりと浮きあがる
鏡背に刻まれた
鶴のすがた

◆エイミー・ローウェル (1874~1925)

米国の詩人。1300頁に及ぶ伝記を執筆するほどキーツに心酔し、エズラ・パウンドと共にイマジズムをアメリカに広め、カバにも喩えられた巨軀に葉巻をくゆらせつつ、生涯650篇以上の詩を生み出した。ニューイングランドの名家に生まれた少女時代から、兄の一人が日本で約10年を過ごすなど、日本の文物に親しみを持つ環境で育つ。和歌・俳句、浮世絵などへの関心は一時的、表層的なものに留まらず、ペリー来日を題材にしたポリフォニックな長詩“Guns as Keys”(鍵としての銃)をはじめ、日本に着想を得た作品が数多くある。



4

珈琲タイムレッスン (大人の絵画教室)

レッスン1-3の反省

- ・黒い縁取り線を入れると立体感が失われます。
- ・光の方向に対する明暗の関係はうまくいきませんでしたか？
- ・美しく張りのある画面になっていきますか？
- ・立方体はフリーハンドで描くとはやく描けます。

○レッスン 1-4 立方体3個組み

- 1 明暗・立方体3個
三段階の明暗です。形は立方体を使います。
- 2 立方体を3個関連づけて描く (課題の目標)
立方体3個を関係づけて描く。大きさは自由です。
右上、手前からの自然光を想定してください。
- 3 注意点(ヒント)
見る方向を多方向から見ると想定して何種類かの立方体を描く練習を始めてみましょう。

・宇宙空間に浮かんでいる立方体を想像しましょう。

・3個の魅力的な関係性をイメージしましょう。

・厚紙で一辺10cmほどの立方体を作ってみるとよくわかります。

はらだてつるつ (美術家)

◆小骨

野口裕

口に垂らすと書いて睡だが
あれは浸出するものではないだろうか

歯ブラシ突っ込んで
ちよつとしゃかしゃか動かせば
じょわじょわと洪水がはじまり
濁流に紛れて
ウースターソースどろソース
大蒜生姜胡椒分葱
ガラクトースフルクトースと
みな飲み下せば

カルシウムだけが舌に残るので
吐き出して掌に置く

さつきテレビ見ながら食ったやつだな
嫌なニュースのように
生命線の上で
ぎらりと光る

◆花びらが舞うように

にしもとめぐみ

耳飾りを外す
腕輪も取る
時計に指輪も抜き取り
ドレスを 脱ぐ

身に付けているもの
から 放たれて
軽くなる
はだかの心地よさ

何を いつから
まといだしたのだろうか
覆うことで忘れていた

タンポポの綿毛の浮遊
このやわらかい時間
するすると生きていけそう

◆蛙合戦

黒田ナオ

夜が来た
窓の外から声がする
池で蛙が鳴いている

なんでやろ
どきどきするのがとまらない
ぐびび、ぐびび、ぐるぐるぐびび
僕のお嫁さんどこですか
逢いたいなあ、逢いたいなあ
ミミズもたっぷり食べてきた
今日も元気いっぱいや
僕を背中に乗せてんか
ぐびび、ぐるる、るるるるる

ああもう、やってられへんわ

ニンゲンの皮を脱ぎ捨てて
ぴょーんと地面に飛び出せば

ぬるぬる光る水のなか
つるつと冷たい足の裏

卵をいっぱい産みたいねん

どこやどこや、ぐるぐるぐびび
僕の大事なお嫁さん

ここやここや
ほら、ここや

◆無原罪な流離

大橋愛由等

佇ちどまったのがいけなかったのか
K駅行きの普通列車が
見慣れたプラットホームから離れていく
毎日この駅で降りているはずが
目眩がする
右脚の次は左脚をだすんだよね
あ行を雲に塗りつけてもいいんだよね
あの列車にひきつづき
テルミノのK駅まで
乗って行ったとしても
行かなかつたとしても
ここにいても、そこにいても
つきまとう異和――
緑黄石が不機嫌だった夕まぐれ刻も
ぼくたちは

倒置法で語らいあつてきた はず
窓際の花瓶には
いつも四・五色添えられていた はず
ぼくたちが昼月が眩しすぎて
精神錯乱になりかけたとき
スピノザ『エチカ』を朗唱してくれた
ロボットが火曜日から黙ったままなのは
単6電池が切れてしまったから
に違いないと
慰めてくれたのは
レンズ豆のソパを呑んだ
午後の二時すぎの
ラヂオニュースを聞きながら
外つ国の仕事歌を
ふたりで輪唱してたときのことであり
それは特定の国旗しか
はためかせないあの風のことを
称賛していたときのことでもあつて
この部屋には いや かの部屋にも
赤色の翻訳機は置かれていないために
簡便な単語だけしか交わせない日々が
もう何か月もつづいてしまつて

のどが渴いてしまつて
ひとつ また ひとつ
この部屋 かの部屋から去つてゆき
残された青色光はころなげに
二足歩行の油壺を照らし出し
「カンビオ、かんびお」
という鳴き声なのかうめき声なのか
響いているのだけど
食卓が突如
黄薔薇三本の重みで倒壊した朝は
無原罪なスクランブルエッグと
古風な香りのマンサニージャを用意して
新月までの日数を確認して
昨日のこの街の降雨量を
記載しようとしていた朝だったのだが
ロボットだけが火曜日から
黄薔薇が泣いていたその泪の粘度を
食卓が堪えきれなかったことを
知っていた 気づいてたはずだと
ぼくたちはうすうす感じていたのだが……

◆ほら貝

月村 香

ピーマンを八つ買いに行く時間には
いつも雨が降つて
しいたけを六こ買うときと重なり
たつたそれだけのことが
繰り返される
雨、それは天界の少なからず崩壊
花粉に誘われるように
鼻水が流れ
つまりはその前に次の行為がある

「泣く」

もう使われなくなつた第一人称より
第二、第三、第四人称の中に
涙が入るのはやさしい行為だ
それを頭に叩きこまれた女は

自分のために流れる涙も鼻水も
ピーマンとともにカットした
「有」であり「終」だ

女はいつもいつも
深い愛をもつて人に接しようとしたがゆえに
お外で悲しいことがあつても
お家にはほら穴があつて
そこでほら貝を吹いた
そして子らにはたくさん泣きなさいと
その時間を無駄と思わなかった

ホヨヨホー ホヨヨホー
やがて夫が帰つてくる
母はどこであるかと聞く
必ず聞く
子らは二階を指さして「あそこ」

わたしはいつだつて寝てた
特に夕刻雨の降る
ピーマンを買いにゆくころ



2022年3月14日
赤穂市で開かれた「カフェ・エクリ」
最後の会合となった

毎月例会を開催することの事務局としての気苦労を経験しているため、「エクリの会」は、参加者のひとりとして参加できる気安さがあった。「エクリの会」の面白さの特徴は、播磨という地域性にこだわって活動していたことである。播磨地域の中心に位置している姫路市をはじめとして、赤穂、龍野な

残念である
神戸と姫路でふたつの詩の会が響きあっていた。
播磨という地域性を全面に押し出した詩の会「カフェ・エクリ」（高谷和幸主宰）が3月の例会をもって終了したのである（ちなみに、「カフェ・エクリ」はもうひとつ小説部門があり千田草介氏が主宰。この会はいまも続いている）。
詩の会「カフェ・エクリ」（以下「エクリの会」）は、わたしが主宰する神戸の「Mélange」例会と同じように、毎月開催。第一部「読書会」、第二部「合評会」、第三部懇親会の構成であったために、足繁く参加させてもらっていた。第一部の読書会では、エメ・セゼールを初めてとして、スピノザ、ペソア、クリステヴァ、フーコー、ヨブ記、一遍、華嚴哲学、法華経、証空、北原白秋、進一男など多岐にわたったテーマを自在に語る機会を与えられたのである。

播磨の地域性を全面に 押し出したエクリの会

どの特色ある都市の会場を移動していた。そして一年にいちど構成員による一泊二日の小旅行も企画されていて、詩人たちによる文学紀行は楽しいものであった。
そのノマド的性格も気に入っていた。まるで中世スペインの王権が首都をトレドに定めるまで、王とその付随する権力機構が、支配する各都市を巡回するありさまに似ている。その流浪的傾向に注目していた。一方の「Mélange」例会は神戸・三宮のスペイン料理カルメンを不変の会場としているので、対極の「スキソフ」性格の会である。両者の対蹠的ありかたも興味深かった。
「エクリの会」の構成メンバーはほとんどが播磨地域在住者で占められ、わたしのように播磨以外の神戸市から参加する者は少数だった。播磨はひとつのまとまった地域としての一休感を感じることができ仕掛けや構造が随所に見られる。それはわたしがフィールドワークの地としていた奄美群島に似ている。その一体性は神戸や阪神間からこの地域を訪れる者にとって新鮮な驚きの連続であった。それは、都市という地場性を解体したあとに生まれる「ごった煮」のカオスのアナキーの魅力を異なり、地域共同体としての「場の力」が現存するトポスであるからだ。
神戸で育ち今も居住しているわたしにとって、近くにこれほど強い地場性を所有している地域が存在することに、大いに刺激を受けてきた。
主宰者の高谷氏から「エクリの会」が終了すると聞いたとき、わたしは思わず「播磨の文化の火が消えてしまう」と叫んだほどであった。さらにメディアとして出していた詩誌「Oct.」も終刊するという。後続の詩誌は高谷氏の個人詩誌として再出発することを希っている。

一誌名変更のお知らせ

ながらく誌名を「月刊 Mélange」としてきましたが、170号から「月刊 MAROAD」に変更しました。これは、「月刊 Mélange」発行当時（2005年）から17年が経過して、参加構成メンバーが入れ替わり、現在の誌友・詩友たちとの連帯を確認し、今後の表現活動の切磋琢磨を願うために変更したものです。（大橋愛由等）

2022年04月24日 通巻172号
発行所/月刊「まろうど」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等
maroad66454@gmail.com
定価 660 円(税込)